2 幼稚園の方が環境整備に対しては熱心な傾向

連携のために取り組んでいる環境整備については、幼稚園では子ども間、教員間の連絡・コミュニケーションを図るための道具立て」が最も多いのに比べ、小学校では「交流のための時間的配慮」が最も多いことがわかりました。日々の活動の計画については、比較的自由度が高い幼稚園に対して、小学校ではカリキュラムは教科教育を中心に綿密に組まれており、その中に連携活動を入れ込んでいくことに難しさを感じているようです。

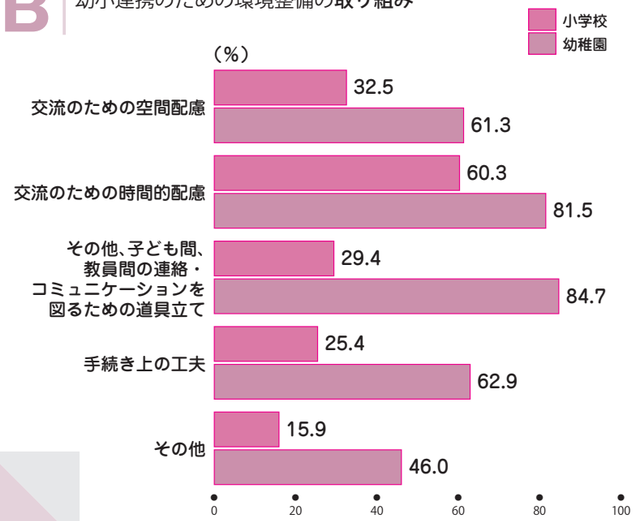
3 最も難しいのは日程調整、次いで教育課程に位置づけていくこと

連携を進める際の課題として、幼稚園・小学校ともに最も多く選択されたのは「日程調整が難しいこと」でした。次に多いのも両者とも共通していて「教育課程に位置づけていくこと」でした。双方とも、日々の授業・保育カリキュラムを実践していく中で、互いの都合を調整する難しさを感じているほか、幼稚園教育と小学校教育をつなげる教育課程の編成に困難さを感じていることがうかがえます。

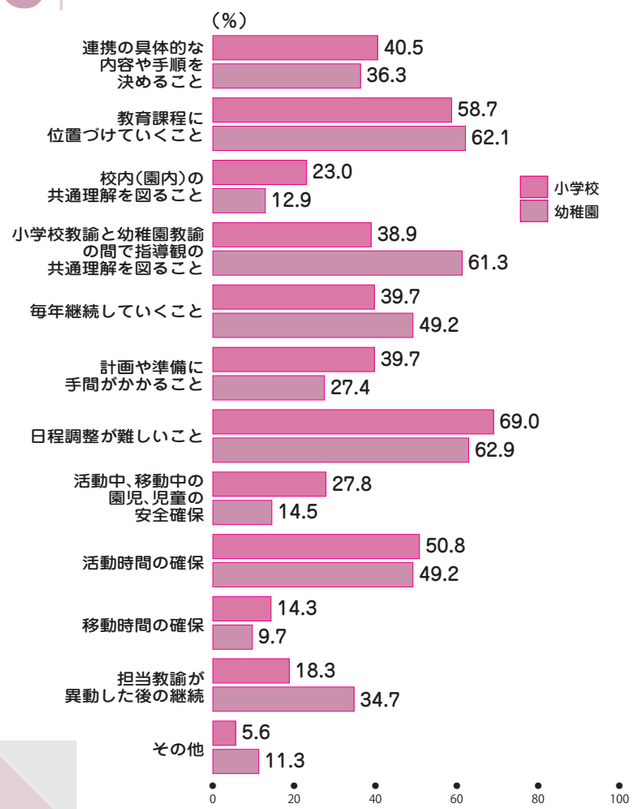
また「小学校教諭と幼稚園教諭の間で指導観の共通理解を図ること」という項目の選択に小学校と幼稚園で差がみられました（小学校38.9% 幼稚園61.3%）。この項目は幼小の移行を考えた時、大きな「壁」と言えるでしょう。そして、これを乗り越えるために子ども達の発達の連続性を考慮して双方で努力し合っていくことが期待されます。

●引用文献 「幼児教育と小学校教育をつなぐ－幼小連携の現状と課題－」（お茶の水女子大学　子ども発達教育研究センター　2005年9月発行）

図B 幼小連携のための環境整備の取り組み



図C 連携を進める際の課題



座　談　会

実りのある幼小連携に向けて

小学校校長が考える、幼稚園との連携の必要性とその方策

今回の幼稚園教育要領改訂では、小学校とのつながりが強調され、子ども同士の交流や教師の連携が求められています。幼稚園教育が小学校以降の学習や生活の基盤をはぐくむことを踏まえ、小学校が幼稚園の教育に期待することは何でしょうか？
今回は、お二人の小学校校長をお招きし、小学校側の視点から幼小連携の必要性や、そのための方策について語っていただきました。

磯部　頼子
ベネッセ次世代育成研究所顧問
元全国国公立幼稚園長会会長

増田 進
市川市立行徳小学校 校長

林 恵子
台東区立田原小学校 校長、
台東区立田原幼稚園 園長

■学校プロフィール

千葉県市川市立行徳小学校

校長◎増田 進先生
児童数◎983人
学級数◎32学級（うち特別支援学級5学級）
所在地◎〒272-0115 千葉県市川市富浜1-1-40
TEL◎047-357-3116
http://www.gyoutoku-syo.ichikawa-school.ed.jp/top/

東京都台東区立田原小学校
※敷地内に台東区立田原幼稚園を併設。

校長◎林 恵子先生
児童数◎443人
学級数◎13学級
所在地◎〒111-0034 東京都台東区雷門1-5-14
TEL◎03-3841-1656
http://www.taitocity.net/tawara-es/

近年の子どもの実態から浮かび上がる幼稚園と家庭の連携の必要性

磯部：本日はよろしくお願いします。近年、小１プロブレムが問題視されていますが、まずは最近の１年生の実態についてお聞かせください。

林：本校の敷地には区立幼稚園が併設されており、私は小学校の校長と園長を兼任しています。併設園の子たちは、日ごろの交流による慣れから、小学校への接続は比較的スムーズですが、他の園から入学する子たちは環境の変化に戸惑うことが少なくありません。とくに幼稚園に比べ、授業以外の点で言うと校舎が大きい、廊下が幼稚園ほど明るくないといった変化も原因のようです。

増田：確かに、環境の変化は１年生が最初につまずくポイントでしょう。ただ、１学期が終わるころには、だいぶ慣れてくるようです。

磯部：最近の子どもの精神面や生活態度はいかがでしょうか。

増田：ベテラン教師の集まりで、最近の子どもの特徴を聞く機会がありました。その話を総合すると、プラス面としては、聞き分けがよく、物怖じをせず、とくに大人との関係づくりがうまい。また未知の物事への意欲が比較的高く、情報量の多さは昔の子とは比べものになりません。保護者の指導によって清潔面に気遣う子どもが増えているのも特徴でしょう。一方、マイナス面としては、自分の要求を口に出せない子が多いようです。「トイレに行きたい」「プリントが回ってこない」といった簡単なことすら言えず、黙って待ってしまう。そのほか、体格はよいけど、姿勢が悪い、うまく走れなくて転びやすいといった身体的な特徴、更に食生活では偏食や少食、食べるのが遅いなどの傾向がうかがえます。

増田 進先生
（千葉県市川市立行徳小学校 校長）

林：本校にも自分の意思を表現できず、代わりに手が出てしまう子がいます。逆に、自分について必要以上に話す反面、他人の話をほとんど聞けないという問題を抱える子も見られます。こうした問題は幼児期に現れますから、園の活動では個に対応する指導を心がけていますが、やはり保護者の育児に対する考え方に大きく左右されるのは否めません。例えば、入学式などで、「今年の保護者は静かに話を聞いている」と思ったら、その子どもたちも落ち着いていたり、逆にどちらも話を聞けない学年があったりして、保護者や家庭環境の影響の大きさを実感します。それだけに、幼稚園と家庭との連携は重要ですね。

磯部：幼稚園や保育所など、就学前の施設による育ちの違いは感じますか。

林：本校の児童の約４分の３は、併設園以外の幼稚園や保育所から入学しますが、各園の方針によって育ちに若干の差を感じるのは確かです。しかし、それ以上に家庭環境の方が関係しているでしょう。

増田：同感です。入学当初は、保育所を出た子のほうが、親と離れる時間が長かったためか、多少、たくましさを感じますが、１学期を過ぎると、ほとんど差は見られなくなります。一方で、家庭環境の差は本当に大きいです。例えば、就学前に塾や習い事に通ったかどうかによって、子どもの知識や体力はまるで異なりますから。しかも、近年、就学前教育に対する保護者間の意識の開きがますます広がっているのを感じます。

幼児期に求められるのは文字や数の知識よりも基本的な生活習慣の習得

磯部：幼稚園児の保護者が気にすることの一つが、就学前に文字や数を教えたほうがよいかどうかということです。そのことに関して、幼稚園の先生方が質問されることは多いのですが、先生方はどのようにお考えでしょうか。

林：入学時に文字を書けるか、あるいは数を数えられるかは、本校の教師はまったく気にしていません。入学後に学び始めればよいと考えています。ただ、以前、幼稚園を対象にしたアンケートを通じて、文字や数の指導に力を入れる園が多いことを知りました。その意味では、小学校と幼稚園および保護者との間には認識のズレがあるのかもしれません。

増田：私は、むしろ就学前には文字や数を教えないでほしいと思っています。というのは、文字の場合、筆順まで覚えていないことが多く、結局、小学校で直さなければいけませんし、数にしても、100まで数えられるかどうかは小学校での算数的な力とはあまり関係がありません。それよりも、服の脱ぎ着やトイレのマナーなど、生活習慣の指導に力を入れてほしいというのが本音です。

磯部：保護者に対し、そのような情報を周知する必要がありそうですね。

増田：そうですね。学区内の公立幼稚園では入学直前の毎年２月に説明会を行い、「自分の名前が読めて、10まで数えられれば十分」とお話しします が、保護者からは「もっと早く言ってほしかった」という反応を感じることがあります。幼稚園の先生方も文字や数は習わなくてよいと話されるのでしょうが、他の子に差をつけられたくないという思いから、「幼稚園の先生はそう言うけど、実際は違うかもしれない」と受け取る保護者も、おそらくいるのでしょう。小学校の教員が直接話せば説得力が違いますから、年度の初めくらいに説明会を設けるのがよいかもしれません。そうすれば、保護者が必要以上に焦ることもなくなるでしょう。

林：私の園では保護者に対し、小学校、さらには中学校の教育を見越して、「今の時期に何をするべきか」ということを、お話しています。併設園ならではの利点かもしれませんが、そのような説明によって保護者に安心感をもってもらえるのは確かだと思います。

磯部：幼小連携においては、子ども、教員、そして保護者による相互交流が考えられますが、先生方の小学校では、現在、どのような活動をされていますか。

林：子ども同士の交流としては、生活科や特別活動を通してふれ合うほか、合同で運動会、音楽会、学芸会などを行っています。一方、職員同士では、小学校教員が幼稚園の工作や音楽を教わったり、逆に幼稚園教員が小学校の研究授業に参加したりする活動をしています。また私立幼稚園からの要請を受け、私が小学校校長として家庭教育学級などでお話をすることもあり、これも連携の一環です。

磯部：それは充実していますね。増田先生の学校は大規模校ですので、難しさもあるのではないでしょうか。

増田：そうですね。公立幼稚園はまだしも、私立の幼稚園や保育所との連携活動は、お互いに相当の労力を要するのが現実です。いろいろな制約を乗り越えて充実させたいとは思うのですが。

幼稚園での表現活動を踏まえた小学校の授業改善が進行中

磯部：今回の小学校学習指導要領の改訂では、生活科や国語、音楽、図工において、幼稚園での表現に関する活動を踏まえての指導が求められています。この点について、今後、指導上からどのような可能性が考えられますか。

林：幼稚園での活動が小学校の教科指導につながる場面は多々あります。例えば、小学校の低学年ではさまざまな植物を育てていますが、幼稚園で

林 恵子先生
（東京都台東区立田原小学校 校長、
台東区立田原幼稚園 園長）

も年少から年長にかけて栽培を体験します。その際の気付きや感動を踏まえることにより、小学校での指導はより充実しますが、そのためには小学校教員が幼稚園での活動内容を十分に理解し、何を生かし、伸ばすべきかを意識するのが不可欠です。その点では、本校の取り組みは、まだまだ不十分と言わざるを得ません。そこで、相互理解の一環として、学期に一回の「幼小中交流の日」を実施しています。これは台東区が５年前から始めた取り組みで、お互いの活動や授業を見学したり、協議会を開いて話し合ったりしています。

磯部：幼小の交流により、どのような効果が生まれていますか。

林：一例ですが、小学校教員が、園庭での子どもの遊びを指導する幼稚園教員の姿を見て、「しっかりと一人ひとりを見ているのだな」と感心していました。幼小の指導の違いを理解することは非常に大切です。例えば、１年生を受けもった教員が、算数の時間に課題が早く終わった順に、教室から離れている図書室に行くのを許可したことがありました。しかし、一人ひとりを自由に行動させるのはまだ早く、子どもたちが廊下を走り出すなどして混乱してしまいました。もし幼稚園での指導を理解し、意識していれば、きっと皆が終わるまで待たせてから図書室に連れて行ったでしょう。

増田：そのお話を聞いて、幼児期の一人ひとりに応じた指導の大切さを踏まえたうえで、その時々の発達段階に応じた指導を検討することの大切さを改めて感じました。

磯部：幼小連携を円滑にするのに役立つものの一つに、幼稚園から小学校に送付される指導要録があります。ベネッセ次世代育成研究所の調査では、国公立の9.5％、私立の33.6％が送付していませんでした（８ページ、図６参照）。法的に裏付けされているにもかかわらず、送付率が低い理由としては、小学校から「必要ない」「参考にならない」と言われたことなどがあるようです。送付するのが目的で作成するわけではありませんが、先生方の小学校では、指導要録はどのように取り扱っていますか。

林：送付期限が３月末日のため、多くの園の指導要録がクラス編成に間に合わないのが実情です。そこで、教員が手分けをして、訪問や電話によって子どもの情報を集めてクラス編成に役立て、指導要録は、入学後、子どもの育ちを改めて確認するのに用いています。もう少し早く送付してもらえると、活用の幅が広がるのですが。

増田：子どもたちの様子がもっと具体的に分かる記述があると助かりますね。本校のクラス編成では、就学時健診などでの子どもたちの様子を参考にすることが多いです。

養育環境の問題から生活習慣などが身に付かず特別な支援が必要になることも

磯部：続いて、特別な支援を要する子どもへの対応について、お聞かせください。最近、特別に支援を必要とする子どもが増えているという話を耳にしますが、小学校での実態はどうでしょうか。

林：いわゆるLD（学習障がい）やADHD（注意欠陥・多動性障がい）などに該当する子どもは昔から一定数存在すると思います。それとは別に、最近は養育環境に起因するケースが増えているのではないでしょうか。育児に問題があったり、また愛情を十分に感じられずに育ったりすることなどから、我慢したり、人と上手にかかわったりできず、手厚い対応が必要となる子どもです。小１プロブレムが問題視される背景には、そのような状況も関係しているのではないかと思われます。

増田：本校では特別支援教育部会を組織し、個別指導計画を作成して対応していますが、その支援に際して、しばしば困難を感じるのが保護者との関係です。保護者が協力的な場合は問題ありませんが、こちらが専門機関などへの受診を勧めても頑として拒否されることも珍しくありません。その場合の説得は非常に困難です。

林：本校でも同じ悩みを抱えています。そのような保護者の中には、幼少期の子どもの養育を放棄するような、特殊なケースもあるようです。

増田：小学校としては、そうした成育環境は切実に知りたい情報です。ある程度、保護者との関係が構築できる前には、なかなか、そこまでの話には踏み込めません。ですから、育児などに関し、幼稚園の段階で保護者とどのような関係を築いてきたかという情報交換ができると非常に助かります。こうした点でも、幼小連携は必要でしょう。

磯部 頼子顧問
（ベネッセ次世代育成研究所）

幼稚園教育で培われる生活習慣や規範意識が義務教育以降の土台になる

磯部：このたびの学校教育法の改正により、幼稚園においては、「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」という幼稚園教育の目標が明確になりました。現在、幼稚園では教育課程の見直しや再編成が進められていますが、小学校など義務教育以降の学校生活に円滑に移行させるために、幼稚園教育ではどのようなことをはぐくんでほしいとお考えでしょうか。

林：基本的な生活習慣や規範意識が身に付いている子どもほど、学習意欲や国語や算数の正答率が高い。このことは文部科学省の調査結果（H19年度全国学力・学習状況調査）などにも表れていますし、私自身も実感しています。幼児教育では、こうした生活や学習の基盤の育成に力を注いでほしいですね。同じように大事なのが、体力ややる気、興味・関心。そして、いかに驚きや感動を体験しているかということです。これらは、小学校でのさまざまな領域における学びの土台になると思います。

増田：おっしゃる通りだと思います。朝食や睡眠時間といった生活習慣と学力には相関関係があると思います。当たり前のことですが、午前中から空腹や眠気に襲われては勉強に身が入るはずがありません。しかし、残念ながら、その当たり前のことができない家庭が増えているのが現状です。家庭での育児に深くかかわることですから難しさもありますが、幼稚園の先生方にも意識していただきたいと思います。それから、幼稚園とは違い、小学校では評価が導入されます。仮にテストの点数が悪い場合、くじけたり、投げやりになったりせず、努力しようと頑張れる力は、幼いころから達成感を積み上げていくことで培われます。さらに、私たち小学校の努力も必要ですが、幼小連携による異年齢との交流では、人とのかかわり方が身に付くでしょう。これもその後の人生において、とても大切なことだと思います。

磯部：最後に幼稚園の先生方に向けて、応援のお言葉をいただけますか。

林：小学校入学前に培った習慣の一部は、なかなか修正できません。いかに幼児期の教育が大切かということでしょう。義務教育ではありませんが、その前段階として不可欠な教育であることを意識し、自信をもって取り組んでいただきたいと思います。

増田：一人ひとりの個性に目を向けて豊かな愛情を注ぐ幼稚園教育は、とても素晴らしいものだと思います。きっと子どもたちにとって一生の財産になるでしょう。小学校でも個性を伸ばす教育を大切にしていますが、幼稚園の先生方の姿勢や愛情からは多くのことを学ばなければならないと感じています。

磯部：具体的なご示唆をたくさんいただきまして、どうもありがとうございました。